演奏会形式による音楽鑑賞会の実践報告—小・中学校における鑑賞教材を用いて—

Practical report of music appreciation party in concert format ≪By using appreciation materials excerpt from a music textbook≫

※仲田久美子・※近野賢一・※松井裕樹・※※小畑真梨子
KUMIKO NAKADA・KENICHI KONNO・HIROKI MATSUI・OBATA MARIKO
※岐阜大学教育学部音楽教育講座　※※三重大学教育学部音楽教育講座

キーワード：実演、鑑賞、鑑賞教育、音楽教育、教科書掲載曲
受理年月日：2020 年 8 月 24 日

1. はじめに

2020 年 1 月 5 日、筆者たち 4 名は、岐阜市内にある「ぎふ清流文化プラザ長良川ホール」（484 名収容）という公共ホールにて入場無料の音楽鑑賞会を開催した。この音楽鑑賞会の開催のきっかけは、「教科書に掲載されている楽曲を学校の機材ではなく、音響の良い公共ホールで幅広い年代層の方々に、直に聴いてもらいたい」という思いによるものであった。

以前から岐阜大学附属中学校の授業内で、実演での音楽鑑賞会を実施するという試みを行ってきたが（仲田・近野ほか、2019）、今回初めて公共ホールで授業と音楽会の両方の特質を併せ持つような音楽鑑賞会を開催した。その開催方法や取り上げる楽曲選曲について出演者全員で検討したが、今回の音楽鑑賞会の開催にあたっては、先行研究ともいえる『行政・教師・演奏家が協働でつくる音楽鑑賞教室の取組み－浜松市における「となりのオーケストラ」からの示唆－』（今、2019）の中でも指摘されている「現場の中では単発的で系統性のある学習内容にはなり難いという課題が指摘されている。」という点を重視しながら構成を考えた。また、「教科書に掲載されている鑑賞教材の楽曲を実演で効果的に聴かせるためにはどうしたらよいか」という点についても試行錯誤した。前述にもあるが、音楽科における鑑賞の授業が「単発的で系統性のある学習内容にはなり難い」という課題を払拭するための方策として、結果的には時代区分や作曲家の出身国、地域・文化の違いが明確になるような楽曲を選択し、個々の楽曲が聴き手に対比しやすい構成になるように配慮した。

音楽科における鑑賞の楽しみについて、筆者たちは、各曲の違いやそのよさを感じたり、自分の好みに気が付いたり、また単純に音を楽しむことに意義があるだろうと考えていたが、ティーチング・アーティスト（久保田、2019）として公共ホールで鑑賞会を開催する点に着目し、観客にとって更に聴く楽しみが増える方法はないだろうかと考えた。また、一方的に演奏をするだけでは聴き手とのコミュニケーションが不足してしまうと考えたため、聴き手と交流するための方法や、鑑賞会内での企画についても検討した。その一つに「アンケート用紙の配布と回収」があった。本論では、鑑賞会の最後に回収したアンケート結果の分析及び考察から、今後の音楽科における「鑑賞の可能性」や「実演による鑑賞の効果」について検討していきたいと考えている。

2. プログラムについて

本鑑賞会は小畑真梨子（ピアノ）、近野賢一（バリトン）、仲田久美子（ピアノ）、松井裕樹（ピアノ）（五十音順）の 4 人による演奏と解説で構成され、休憩を挟んだ二部構成であった。前半のはじめに「出演者の紹介とあいさつ」を行い、仲田による「鑑賞会開催の主旨」の説明のあと「本日の鑑賞会のめあて」として、どのようにこの鑑賞会を楽しんでもらいたいかを説明した。前半のはじめにはバッハ作曲『小フーガト短調』（楽曲解説とクイズ：2 分、演奏時間：4 分）を小畑と仲田によるピアノ連弾で演奏した。次に近野（バリトン）と松井（ピアノ）がシューベルト作曲『魔王』（楽曲解説：5 分、演奏時間：4 分）を演奏した。前半の最後には小畑と松井がピアノ連弾でムソルグスキー作曲『展覧会の絵』（抜粋）

（楽曲解説：3 分、演奏時間：7 分）を演奏した。そして休憩後の第二部では、近野（バリトン）と松井（ピアノ）が滝廉太郎作曲『荒城の月』、続けて山田耕筰作曲『この道』及び『赤とんぼ』（楽曲解説：3 分、演奏時間：10 分）を演奏した。次に小畑と仲田によるピアノ連弾で山田耕筰作曲＝当摩泰久編曲『ピアノ連弾のための赤とんぼ』（楽曲解説なし、演奏時間：4 分）を演奏した後、後半のプログラムの最後には小畑と松井のピアノ連弾でスメタナ作曲『モルダウ』（楽曲解説：2 分、演奏時間：14 分）を演奏した。アンコールでは近野（バリトン）と松井（ピアノ）がカプア作曲『オー・ソレ・ミオ』（演奏時間：4 分）を演奏し、続くアンコール 2 曲目では、小畑と仲田がピアノ連弾によるバッハ作曲『G 線上のアリア（ピアノ連弾版）』（演奏時間：3 分）を演奏した。そしてこの鑑賞会の最後となるアンコール 3 曲目では、アンダーソン作曲『トランペット吹きの休日』（演奏時間：3 分）を出演者全員（鍵盤ハーモニカを小畑、ピアノ伴奏を仲田、打楽器を近野と松井がそれぞれ担当）で演奏した。

ここまでに示した各曲の演奏所要時間から分かるように、演奏時間が比較的長いものは『モルダウ』だけで、その他は比較的短い楽曲で構成されている。音楽科の鑑賞の時間では様々な理由から楽曲の有名な一部分だけを聴かせる授業もあるが、本鑑賞会の『モルダウ』については、はじめから終わりまで鑑賞してもらいたいという演奏者の考えを反映した。とりわけ、『モルダウ』について言及したことの背景に、スメタナによる 6 つの交響詩を連ねた大作“連作交響詩”の中の第 2 曲目『モルダウ』であることが関係する。連作としての意味付けや、第 1 曲目『ヴィシェフラド』の主題が第 2 曲目『モルダウ』に組み込まれている意図なども含め、全 6 曲を通して鑑賞することで新たに見えてくる『モルダウ』の景色もある。ただ 6 曲すべての演奏時間は 70 分以上で、管弦楽としても全曲演奏を実現することは多くはないのが現状である。鑑賞教材である“『モルダウ』を知る”といった観点から 6 つの連作交響詩に焦点をあて、音楽科の限られた授業時数の中では体験できない鑑賞を実現することも工夫次第では「鑑賞の可能性」および「実演の効果」が期待できるのではないかと考えている。（同様に『展覧会の絵』についても今回のプログラムでは時間の都合上抜粋の演奏となった。）実際、アンケートの自由記述欄に、「よく聴いた曲でもスメタナの曲を最後の方はあまり知らなかったので楽しかった！」という記述があったが、作品の全体像を知ることで聴き手が面白さを感じ得ることもあり、それは音楽を楽しむ上で、演奏者が考慮すべき点の一つと言えるのではないだろうか。

本鑑賞会の来場者は後に示すアンケート結果の Q1 にあるように全体で 346 名で、年代は未就学児から学生、成人に渡り幅広い年代となった。本来、音楽の授業における鑑賞は時間割中の 1 コマで行われ、いつもの音楽室で同じクラスの子どもたちと音楽を視聴する=鑑賞する、終われば直ぐに別の教科の授業の準備といった 1 日の学習活動の中であわただしく展開されていくのが通常である。しかし、今回の鑑賞会のように実際にコンサートホールに出かけ、じっくりと音楽に身を投じ、かつ幅広い年代が集う場所でそれぞれの感想を交流させながら楽しむという活動は、音楽を鑑賞する、また楽しむ上での醍醐味でもある。実際、「授業だけではなく、こういう機会にゆっくりと鑑賞することは貴重な経験となった」「CD やテープでは聴き取れない発音が聴けた」といった声もあった。一方で本鑑賞会では演奏者から聴き手へのアプローチを 3 つの段階で行っており、①事前配布のプログラム冊子による解説、②演奏者による舞台上での解説、③生の音としての実演、これらの働きかけが聴き手に対し「音楽を視聴する姿勢に導くこと」の一助となったとも考えているが、このあたりの検証については、こういったスタイルの鑑賞会を続けていく中で中長期的に省察していく必要がある。

以下、本鑑賞会で演奏した曲目について、プログラム順に解説を述べる。

●小フーガト短調（バッハ作曲）

中学校 2 学年の音楽鑑賞教材である。バロック時代の作曲家バッハが作曲したパイプオルガンのための楽曲であるが、本鑑賞会ではピアノ連弾編曲用の譜面を使用して演奏した。演奏前に「フーガ」の語

源についてのクイズを観客に向けて出題した。ヒントのために、主題を取り出して演奏した。答え合わせについては、第1部終了後から回答をホールロビーに掲示し、休憩中や鑑賞会後に観客が個々に答え合わせができるようにした。この曲の鑑賞をより楽しめるようにと、主題の聴取、調性の変化、音の重なり、時代様式が分かるような演奏を心がけた。

●魔王（シューベルト作曲）

昭和22年の第1次学習指導要領に「鑑賞レコード教材」として示され、昭和43年の第4次学習指導要領からは「鑑賞共通教材」として示されている曲である。平成10年の第7次学習指導要領より「鑑賞共通教材」が廃止されたが、現在も教科書に鑑賞教材として掲載されている。声楽パートは四者の役を歌い分ける劇的なバラードであり、ピアノパートの三連符連打が表現する描写などが特徴的であり、知名度の高い曲であるといえる。演奏前の解説では、演奏者のこの曲との出会いのエピソードを話し、訳詞を配布プログラムに掲載した。

●組曲『展覧会の絵』より「プロムナード」、「鶏の足の上に建つ小屋」、「キエフの大門」（ムソルグフスキー作曲）

ラヴェルの編曲した管弦楽版がとくに有名であるが、元々はピアノ独奏用として作曲された曲である。また、ラヴェル以外の作曲家もこの曲を管弦楽版に編曲している。この鑑賞会では、リムスキー＝コルサコフによって編曲された管弦楽版をピアノ連弾にアレンジした版を使用した。リムスキー＝コルサコフの編曲した管弦楽版は、どちらかと言えばあまり演奏される機会が少ないが、ムソルグスキーの友人としても知られるリムスキー＝コルサコフが編曲した管弦楽版は、ラヴェルの編曲した管弦楽版よりもロシアの雰囲気やムソルグスキーの音楽が味わえるとの評価もある。

●荒城の月（滝廉太郎作曲）

作曲当時、教科書に純粋な日本の歌がなかったため、唱歌の懸賞募集に応えて作曲した曲として知られている。滝の楽曲は昭和22年の第1次学習指導要領の「鑑賞レコード教材」として『花』が示されており、昭和52年の第5次学習指導要領には、『花』、『荒城の月』に加え『箱根八里』も鑑賞共通教材として学習指導要領に示されている。演奏前の解説では、原曲がアカペラであり、ピアノ伴奏の付いた版は山田耕筰によるものであること、またその際に旋律が一部変えられていることを説明した。演奏はこの山田耕筰による版で行った。

●この道（山田耕筰作曲）

日本の美しい風景を連想させる北原白秋の詩が印象的な曲である。1節と2節では白秋が晩年に旅行した北海道の風景が、3節と4節では白秋が幼少時代を過ごした熊本県柳川の風景が歌われている。昭和52年の第5次学習指導要領から『赤とんぼ』『待ちぼうけ』の曲と併せてこの曲が鑑賞共通教材として示されている。

●赤とんぼ（山田耕筰作曲）

山田耕筰41歳の作品で、『赤とんぼ』の部分の旋律は当時のイントネーションを表現したものとして知られており印象的な作品である。この曲も先述の通り第5次学習指導要領から鑑賞共通教材として示されており、現在の教科書にも掲載されている。

●ピアノ連弾のための赤とんぼ（山田耕筰作曲＝当摩泰久編曲）

この曲は音楽科の鑑賞教材として教科書には掲載はされていない。歌曲『赤とんぼ』に関連した楽曲が存在する例として紹介したいと考えたことと、ピアノ連弾の楽しさを知ってもらうために有効な曲だと考え選択した。使用した譜面は「株式会社全音楽譜出版社カワイ出版、ピアノ連弾のための赤とんぼ・浜辺の歌」である。

●交響詩『我が祖国』より「モルダウ」（スメタナ作曲）

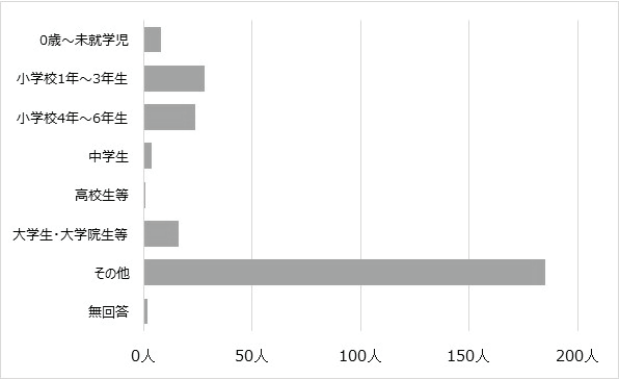
チェコ共和国にある、国最長の川であるブルタヴァ川の様子が描写されており、世代や国を超えて愛されている曲の一つである。管弦楽版が広く知られているが、本鑑賞会では作曲者自身によって編曲された連弾版を用いて演奏した。管弦楽版にはない味わいや魅力があり、演奏者さえ揃えば学校の音楽室でも鑑賞することができる。昭和 52 年の第 5 次学習指導要領より鑑賞共通教材としてこの曲が示されている。

3. アンケート結果の分析

本鑑賞会では、来場者の年代、本鑑賞会で取り上げた楽曲と小・中学校での鑑賞の授業について調査を行った。アンケートの結果は、以下に示す通りである。

Q1.来場者の年代

1	0歳～未就学児	8人
2	小学校1年～3年生	28人
3	小学校4年～6年生	24人
4	中学生	4人
5	高校生等	1人
6	大学生・大学院生等	16人
7	その他	185人
8	無回答	2人
	合計	268人



＜その他の内訳＞

一般成人	72人	教育関係等	29人
主婦	82人	無回答	2人

Q2.知っていた・聴いたことがある曲　（回答者数 250 名･複数回答可）

第１位	赤とんぼ	222人
第２位	荒城の月	190人
第３位	この道	177人
第４位	魔王	172人
第５位	モルダウ	160人
第６位	展覧会の絵	157人
第７位	小フーガト短調	142人
第８位	アンコール曲	73人
第９位	ピアノ連弾のための赤とんぼ	70人

※「アンコール曲」は、『オー・ソレ・ミオ』『G線上のアリア』『トランペット吹きの休日』

『聴いたことのある曲』年代別　上位3曲

0歳～未就学児

1位	赤とんぼ	3人
2位	展覧会の絵	2人
3位	小フーガト短調、ピアノ連弾のための赤とんぼ、この道、モルダウ	各1人

小学校1年～3年生

1位	赤とんぼ	16人
2位	アンコール曲	6人
3位	展覧会の絵	5人

小学校4年～6年生

1位	赤とんぼ	19人
2位	展覧会の絵	13人
3位	魔王	10人

中学生

1位	魔王	3人
2位	赤とんぼ、モルダウ	各2人
3位	小フーガト短調、ピアノ連弾のための赤とんぼ	各1人

高校生等

－	小フーガト短調、魔王、荒城の月、この道、赤とんぼ、モルダウ	1人

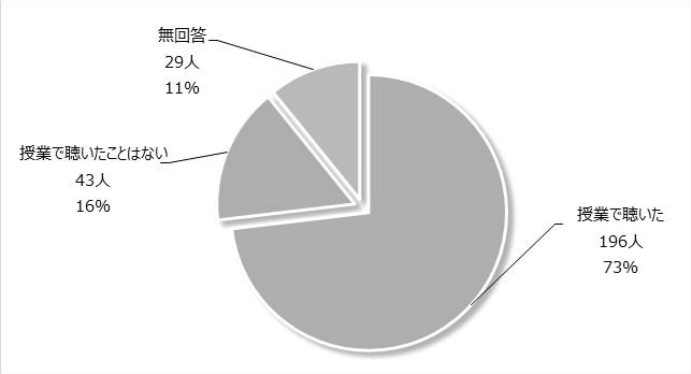
大学生・大学院生等

1位	小フーガト短調、魔王、展覧会の絵	各16人
2位	赤とんぼ	15人
3位	荒城の月	14人

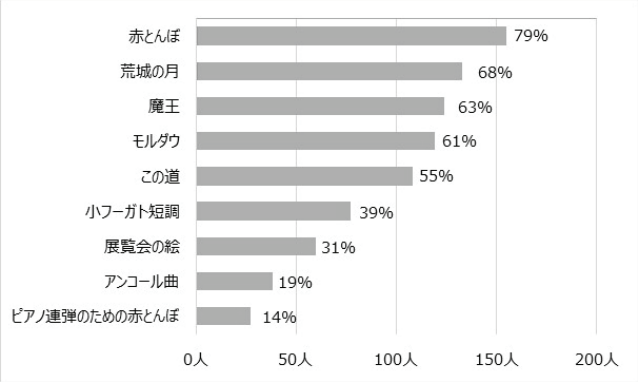
その他（一般成人・主婦・教育関係等）

1位	荒城の月	167人
2位	赤とんぼ	165人
3位	この道	151人

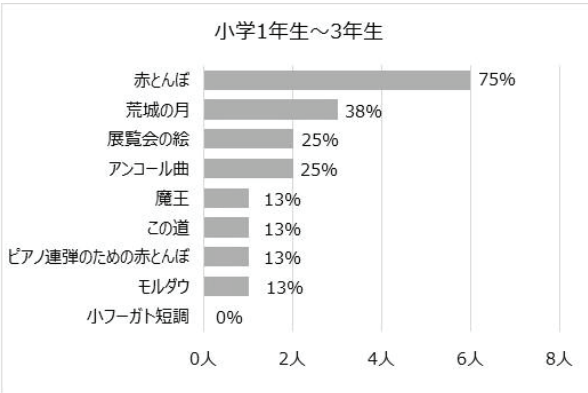
Q3.学校の音楽の授業で、このコンサートで演奏した曲を聴いたことがありますか

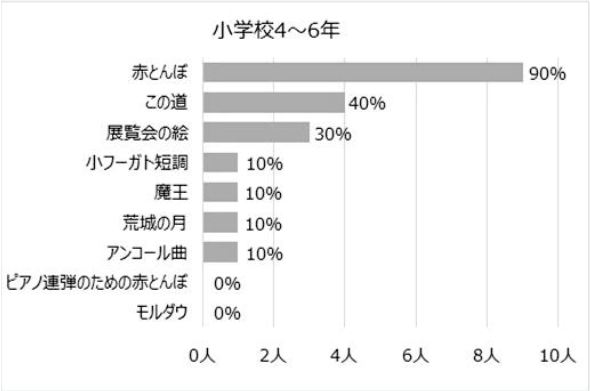


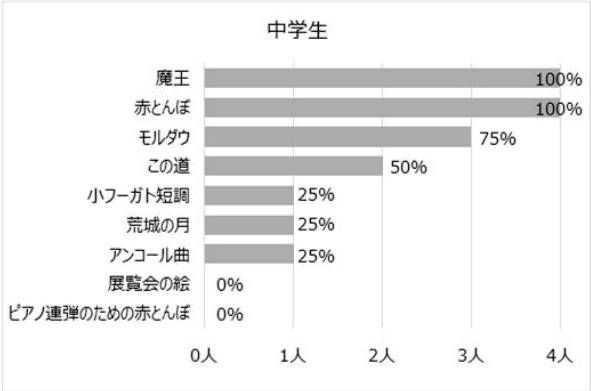
「授業で聴いた」と回答した人の、授業で聴いた楽曲内訳　（回答者数 196 名･複数回答可）

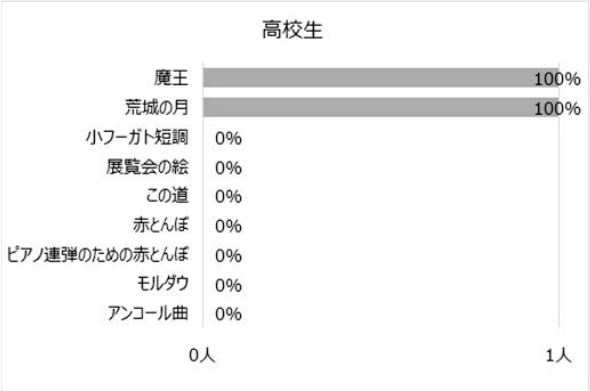


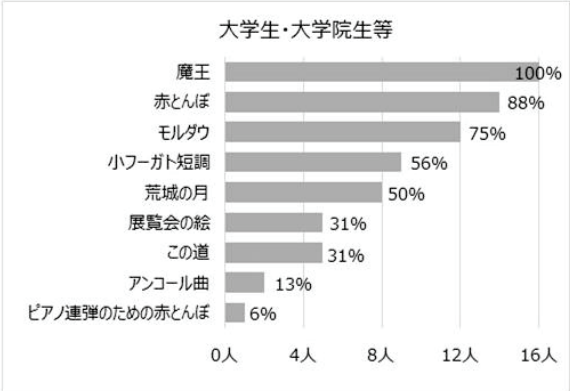
年代別　内訳

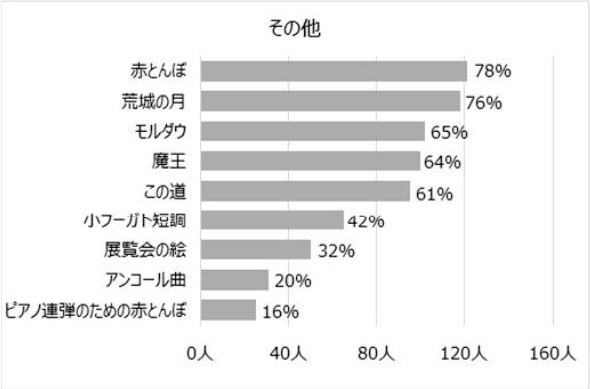












小学校の時に学習した曲　上位3曲

1位	赤とんぼ	88人
2位	荒城の月	49人
3位	この道	46人

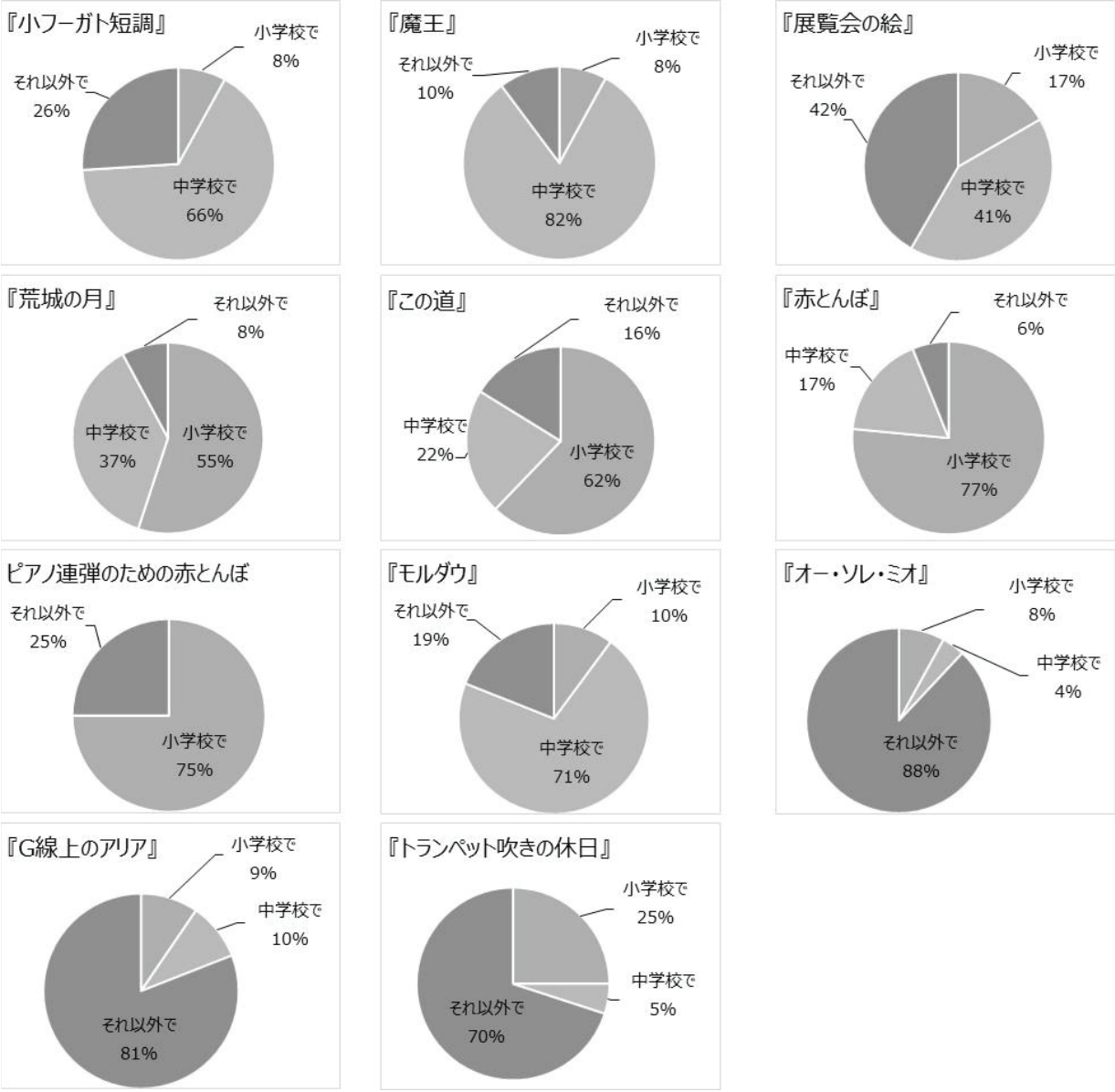
中学校の時に学習した曲　上位3曲

1位	魔王	72人
2位	モルダウ	56人
3位	小フーガト短調	33人

小・中学校以外で学習した曲　上位3曲

1位	オー・ソレ・ミオ	22人
2位	G線上のアリア	17人
3位	展覧会の絵	15人

各曲の学習した時期



次に、各設問からの考察を述べる。

◎学校の音楽の授業で、このコンサートで取り上げた曲を聴いたことがありますか

質問３において、本鑑賞会で演奏した曲を、学校の音楽の授業で聴いたことがあるかを尋ねたところ、およそ７割の来場者が「授業で聴いたことがある」と答えており、多くの学校で、教科書に掲載された曲や指導要領で示された曲が教材として鑑賞の授業で取り上げられていると考えられる。以前、筆者らの拙論（仲田・近野ほか、2019）において、音楽の授業時間数の少なさや授業の難しさから、鑑賞の授業は多くの音楽教師の悩みとなっていることを述べたが、この回答結果からは、時間や授業を工夫しながら鑑賞の授業が行われている学校が多いことがうかがえる。

しかし、「授業で聴いたことがある」とした人の中には下記のような記述も見られた。

来場者１：小学校で少しクラシック音楽を聴いたことがあるような気がします。中学校では、クラシックは全く聴きませんでした。合唱ばかりでした。（一般成人）

来場者２：中学校の授業は合唱とテストのためのリコーダーだけでしたので、教科書を使ったのは小学校まででした。（一般成人）

来場者３：よく聴いた曲でもスメタナの曲を最後の方はあまり知らなかったので楽しかった！（大学生・大学院生等）

来場者４：主要なパートは知っていても曲全体を知らなかったので、「こんな曲だったんだー！」と大人になって改めて意外に感じました。（一般成人）

来場者１・２の記述からは、特に中学校の音楽の授業で鑑賞が少なかったことがうかがえる。また、鑑賞の授業に対して合唱が多かったと記述している点も共通しており、鑑賞授業の時間の確保と、表現と鑑賞の学習バランスについては、音楽科の課題として今後も考えなければならない問題であるといえよう。

また、来場者３・４の記述からは、鑑賞の授業では、曲の一部分しか鑑賞されていない可能性があることがうかがえる。現在様々な授業のスタイルが研究されており、鑑賞の際、演奏時間等を考慮して、曲の一部のみを鑑賞させる方法も報告されている。しかし、曲の一部のみを鑑賞させる場合は、来場者３・４の記述にあるように、最後まで聴くことで「楽しかった」と感じる人もいることを念頭に置いた上で、授業展開を工夫する必要があるといえる。

◎このコンサートの曲で取り上げた曲を「授業で聴いた」と回答した人の、授業で聴いた楽曲について

質問３において、このコンサートで取り上げた曲を「授業で聴いたことがある」と回答した人の中から、どの曲を授業で聴いたことがあるかを尋ねた。その結果、およそ８割の人が『赤とんぼ』を、次いでおよそ６割を超える人が『荒城の月』『魔王』『モルダウ』の楽曲を授業で聴いたことがあると回答している。

これに対して、『この道』は約55%、『小フーガト短調』では約39%、『展覧会の絵』では約30%の人が授業で聴いたことがあると回答しており、これらの楽曲は授業であまり扱われていないことがうかがえる。特に『小フーガト短調』『展覧会の絵』では、およそ７割の人が授業では聴いていないことになる。なお、この２曲については、質問２「あなたが知っていた曲・聴いたことがあった曲を教えてください」の回答で、『小フーガト短調』では56%の人が、『展覧会の絵』では62%の人がそれぞれ知っていたと答えており、来場者の多くはこれらの曲を授業以外で知ったということになる。

この『小フーガト短調』及び『展覧会の絵』は、岐阜県の小・中学校で扱われている教科書ではそれぞれ、「中学生の音楽２・３」の上巻と下巻に掲載されており、中学校２・３年生で扱われることになっている。この２曲について、授業であまり扱われない傾向がある要因として、授業時間数との関係が考えられそうである。今後、これらの関連性について調査し、鑑賞の授業時間についての問題を掘り下げて考察したい。

4. 今後の課題について

音楽科の鑑賞については、既に多くの人が研究し、意見しているところである。いずれの場合でも、音楽科の鑑賞授業では学習内容をきちんと把握し、児童生徒に獲得させることが大事であるということで一致している。音楽科の鑑賞の授業の指導について寺田は、「学校の音楽科授業での鑑賞指導は、学校教育として展開されるのであるから、授業の鑑賞指導で聴く場合には、その授業の目標に向かって学習内容を獲得することが重要なのである」（寺田、2018）と述べている。寺田は「音楽鑑賞の授業づくり

のポイントが整理されていない」という点を指摘し、「①音楽の雰囲気や情景」「②音楽を形づくっている要素」「③楽曲に関する知識、作曲家に関すること」を音楽科の鑑賞指導で教えることが可能であるとしている。これらは、今回実施した鑑賞会のような形態（公共ホールにて、演奏家がティーチング・アーチストとして実施する方法）で鑑賞会を実施する場合にも当てはまると思われるし、本鑑賞会でも心がけた点である。これらの授業づくりのポイントの整理をしながら、音楽科の鑑賞授業のような鑑賞会を公共ホールで行う活動を今後も続け、その中で、中学校の音楽の授業での鑑賞の時間を補ったり、曲の一部分しか鑑賞されていなかったりするなどの諸問題についても少しずつではあるが考えていきたいと思う。

5. 参考文献、参考資料

今由佳里、『行政・教師・演奏家が協働でつくる音楽鑑賞教室の取組み　－浜松市における「となりのオーケストラ」からの示唆－』、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要第 28 巻、pp.27-35、2019 年。http://hdl.handle.net/10232/00030560（閲覧日：2020 年 7 月 1 日）

久保田慶一、『新しい音楽鑑賞：知識から体験へ』、水曜社、2019 年。

寺田貴雄ほか、『初等音楽科教育』吉田武男監修、笹野恵理子編著、「第 11 章　初等音楽科教育の実践④—B 鑑賞—、ミネルヴァ書房、2018 年。

仲田久美子、近野賢一ほか『岐阜大学附属中学校の生徒を対象とした音楽鑑賞会の実践報告—音楽系部活動所属生徒を対象として—』、岐阜大学教育学部研究報告人文科学第 68 巻 2 号、pp.59-68、2020 年。

西島千尋、『鑑賞教材一覧表』、2010 年。https://www.shin-yo-sha.co.jp/media/Kanshow-kyozai.pdf（閲覧日：2020 年 7 月 7 日）

付録【鑑賞会で配布したアンケート用紙】（実際のサイズは A4用紙１枚分）

「教科書のなかの音楽」アンケート　当てはまるところに〇をつけてください。

質問1．あなたは以下のどれに当てはまりますか？

・0 歳～未就学児　・小学校 1～3 年生　・小学校 4～6 年生　・中学生　・高校生等

・大学生・大学院生等　・その他（　・一般成人　・主婦　・教育関係等　）

質問2．あなたが知っていた曲・聴いたことがあった曲をおしえてください。

・バッハ『小フーガト短調』・シューベルト『魔王』・ムソルグスキー『展覧会の絵』・滝廉太郎『荒城の月』

・山田耕筰『この道』・山田耕筰『赤とんぼ』・『ピアノ連弾のための赤とんぼ』・スメタナ『モルダウ』

・（おまけの曲）

質問3．学校の音楽の授業で、このコンサートで取り上げた曲を聴いたことがありますか？

・はい　・いいえ　「質問4」へおすすみください。

「はい」の方はつづけておこたえください。

◇それはどの曲目ですか？

・バッハ『小フーガト短調』・シューベルト『魔王』・ムソルグスキー『展覧会の絵』・滝廉太郎『荒城の月』

・山田耕筰『この道』・山田耕筰『赤とんぼ』・『ピアノ連弾のための赤とんぼ』・スメタナ『モルダウ』

・（おまけの曲）

◇それ（それら）はいつ聴きましたか？

・小学生のとき　曲目（　　）

・中学生のとき　曲目（　　）

・それ以外のとき　曲目（　　）

質問4．実演での音楽鑑賞会はいかがでしたか？

・たのしめた・どちらかというとたのしめた・どちらかというとたのしめなかった・たのしめなかった

ご意見・ご感想等、演奏者へのメッセージがありましたらお書きください。